

## 高等学校の正規英語授業でCALL教材を活用した指導実践

与那覇 信恵<sup>1)</sup>・楠 知美<sup>2)</sup>・竹蓋 順子<sup>1)</sup>・高橋 秀夫<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>千葉大学大学院国際学術研究院    <sup>2)</sup>横浜市立サイエンスフロンティア高等学校

### Using CALL Materials in English Classes at a High School

YONAHA Nobue, KUSU Tomomi, TAKEFUTA Junko and TAKAHASHI Hideo

#### 要旨

本報告は、千葉大学で開発された Listen to Me! シリーズの英語聴解力養成用CALL教材を使用して、公立高等学校の正規英語授業で実施された指導の内容とその結果を記すものである。各年度およそ280名の高校1年生を対象に、のべ8年間にわたり、年間を通して複数の教員が指導を実施した。指導後のアンケート調査では、千葉大学のCALL教材学習者と同様、7割近くの学習者が聞き取りの力がついたと回答した。一方、千葉大学よりも評価が低い項目もあったが、アンケートの分析から教材の難易度または興味が合わない学習者がいたことが大きな要因であったことが推定された。また、高校で指導を行った教員に対する調査の結果、CALL教材を使った指導により生徒の英語力向上を感じたこと、指導の負担はそれほど大きくなかったことなどが明らかになった。

#### キーワード

英語聴解力養成、CALL、高等学校、正規授業

## 1. はじめに

千葉大学では1994年から、普遍教育の英語科目を中心にCALL (Computer-assisted Language Learning) 教材を使った指導が継続的に実施されている。一般にCALLを大学に導入する場合、市販教材を購入するか、教員が個人で開発をした教材を小規模に使用するケースが多いが、千葉大学では当初から同大学の研究者が提唱した独自の英語指導理論「三ラウンド・システム」<sup>1)</sup>(竹蓋, 1997)に基づき、複数の大学教員からなるチームで開発した教材を使用している。教材開発は、30年以上継続して行われてきており、2021年度現在、聴解力養成用教材24種、語彙力養成用教材15種が使用可能なだけでなく、新たな教材開発も進行中である。教材のレベルは、中学生の使用も可能な(石川・西垣, 2005)初級レベルから、大学の講義やニュースを素材とした上級レベルまで幅広く、短い日常会話、様々な職業や立場にある人へのインタビュー、学生同士の対話、ニュース、映画など内容も多岐にわたり、理系、医療系など複数のESP (English for Specific Purposes) 教材も開発されている。さらに、アメリカ英語、イギリス英語、オーストラリア英語、カナダ英語、英語非母語話者による英語などバラエティに富んだ英語を素材とした教材がいつでも利用できるになっている。千葉大学の1年生向けの普遍英語科目では、個々の学生の英語力レベルに合わせた、また学部によっては専門の内容と関連した教材を割り当てることで、レベルに合った教材を、興味を持って学習できるような体制を整えるとともに、2年生以上を対象とした選択科目では英・米・豪への留学準備など、学生の目的に合わせた英語力養成が可能な科目を設置している。

千葉大学で開発されたCALL教材(以下、千葉大CALL)は、京都大学、東京大学、大阪大学、長崎大学といった国立大学をはじめ、名古屋外国語大学、文京学院大学、東洋大学、國學院大學など複数の大学での継続的な使用実績がある。大学生を対象に開発された教材が多いため、高等学校での指導実践は多くはないが、楠(2005)は、公立高等学校の授業の一部で千葉大CALLを使った指導を39名に1年間実施し、学習者から肯定的な評価を得たことに加え、外部テストの結果で全国の高校2年生の平均点を上回ったと報告している。桑原・高橋(2010)は、公立高等学校の英語授業で、約8カ月間千葉大CALLを使った指導を1クラス41名に行った結果、応用問題でも有意な上昇が見られたと記している。武谷(2013)は、放課後クラブ活動で32名が千葉大CALLを使った学習を1年間継続して行った結果、学習を行っていない生徒と比較してGTEC for STUDENTS Basicの上昇スコアに有意な差が見られたことを報告している。特にリスニングスコアの上昇量は、千葉大CALLを使った学習を行っていない群と比較して約4.5倍と顕著なものであった。

しかしながら高等学校での指導に関しては、上記のいずれも1名の教員が、1クラスまたは1つのクラブ所属者といった比較的少人数の学習者を対象に行った、単発の指導に関して報告しているものであり、長期間にわたり、複数の教員が担当した複数のクラスで指導した報告は今までなかった。本稿は千葉大CALLを使った指導を、高等学校で長期間に

わたり大規模に実施した実践について報告するものである。

## 2. 目的

本稿の目的は、千葉大学で開発された大学生用のCALL教材を、高等学校の正規英語授業で継続的に使用した指導実践について報告し、学習者と教員の双方の視点からその効果を検証することである。

## 3. 授業概要

### 3.1 千葉大CALL導入経緯と授業概要

本指導実践は、神奈川県にある公立高等学校（以下A高校）で行われた。公立学校の教員は毎年異動のため入れ替わるが、2012年度、千葉大CALLを使った指導実践経験のある英語教員が2名、A高校に配属された。他校での実践でその高い効果を実感していたその2名の発案により、高等学校の英語教育で不足している英語聴解力養成に焦点を当てた指導を実現するために、1年生全員を対象に千葉大CALLを使った指導を2013年度から行うことが決定された。

科目名：「英語表現I」週2コマの内、1コマで千葉大CALLを使用

指導対象：1年生 各年度約280名（1学年の生徒全員 40名×7クラス）

指導実施年度：2013年度～2020年度（計8年間）

指導場所：生徒用PC端末約40台と教員用PC端末1台が設置されたLL教室

授業担当者：各年度4～5名の日本人英語科教諭

使用教材：First Listening（竹蓋他，2001）

毎年度数名は Introduction to College Life（竹蓋他，2002）も学習

A高校では「英語表現I」を1年生全員が受講する科目と位置付け、週2回ある授業のうちの片方で発信力養成に重点を置いた指導、もう片方で聴解力養成に焦点を当てた指導を行うことにした。本報告では、前者をスピーキング授業、後者をリスニング授業と呼ぶ。きめ細かい指導を行うため、約40名からなる1クラスを2つに分け、クラスの半分の生徒がスピーキング授業を受けている時、残りの半分の生徒はリスニング授業を受けるようにした。定期テストは、両クラスそれぞれで指導した内容が半分ずつ入るようにした共通問題を使って実施した。

スピーキング授業では、検定教科書を使って日本人英語教員と Assistant English Teacher がティームティーチングで指導し、リスニング授業は日本人英語教員が1名で担当した。本報告は千葉大CALLの使用に焦点を当てるため、主にリスニング授業に関して報告する。

### 3.2 リスニング授業の指導内容

リスニング授業は、PC教室授業支援システム（チエルCalaboEX）が搭載された40台の生徒用コンピュータ端末と教員用端末が設置されたLL教室で行われた。50分授業のうち半分で千葉大CALLを使った学習、半分では映画を教材とした指導を実施した。映画は学期ごとに扱う素材と到達目標を変え、1学期には学習したシーンをそのまま言えること、2学期には学習したシーンを劇で演じること、3学期には学習したシーンをアレンジして演じることを目標とした。リスニング授業の学期ごとの教材を表1に示す。

表1 リスニング授業の教材

	千葉大CALL	映画
1学期	<i>First Listening</i> Unit 1～2	<i>E.T. The Extra-Terrestrial</i>
2学期	<i>First Listening</i> Unit 3～4	<i>Field of Dreams</i>
3学期	<i>First Listening</i> Unit 5	<i>My Neighbor Totoro</i>

本指導で採用したCALL教材は、千葉大学で開発された聴解力養成用教材のうち、初級レベルの *First Listening* である。この教材は、合計30～40時間程度の学習を想定したもので、1994～2002年度の高等学校英語科目 Oral Communication B の検定教科書『Listen to the World』（竹蓋編，1994）の一部を抜粋しCALL教材化したものである。*First Listening* は5つのUnitから構成され、Situational Dialogues、Messages、Student Life、Humor、Documentaries and Newsといった内容からなっている。最初のUnit1は比較的平易な短い日常会話で、英語のリスニングが苦手な学習者でも学習しやすいものであるが、後半のUnitになると英語素材の長さが増すだけでなく、使用されている語彙レベルが上がり、高いレベルまで聴解力を引き上げる構成となっている。1990年代に作られたが普遍的な内容を扱っているため、現在でも違和感なく学べる内容であり、多くの高校生の英語力に適したものであったと言える。

千葉大学ではこの教材がオンラインで使用可能となっているが、本指導実践ではCD-ROM版（オフライン版）を使用した。LL教室の生徒用端末に教材プログラムをインストールして生徒にアクセスさせていたため、生徒はLL教室でのみ教材を使うことが可能であった。なお、A高校では海外帰国生を毎年一定数受け入れており、その中には英語が堪能な生徒もいる。そのような生徒は他と比べてかなり早く *First Listening* の学習を終えてしまうことがあった。その場合は、*First Listening* 学習後に、初中級レベルの *Introduction to College Life* を学習させた。生徒は基本的に、週1回あるリスニング授業中に、教員に指示された時間内でのみ教材を使用した。定期テスト前には放課後に予約をすればLL教室を使える期間を設け、復習したいという生徒のニーズに応えるようにした。

## 4. 結果と考察

### 4.1 学習者による主観的評価

#### 4.1.1 5段階評価

##### (1) 千葉大学との比較

本指導実践では、毎年度約1年間の指導後の3月に学習者を対象としたアンケート調査を実施し、学習者の教材に対する主観的評価のデータを収集した。ただし、2019年度は新型コロナウイルスの感染拡大により、年度の終わりに全国一斉休校が実施されたためアンケートが実施できなかった。そのため、2019年度分を除く7年分、計1,875名の回答が収集された。なお、アンケート実施日に欠席した学習者のデータは含まれていない。

アンケートは、5段階で回答する項目と、学習者の教材を使用した感想と意見を自由に記述する部分から構成されていた。5段階評価の項目には、千葉大学のCALL授業で実施しているアンケートと同様のものがあつた。そこで、その中でも成就感と満足感に関する項目を、千葉大学のCALL授業受講者10,813名分の回答をまとめたもの(土肥, 2011)と並べて表2に示した。ただし、千葉大のデータは *First Listening* 学習者のみのデータではなく、プレイスメントテストによりレベルの合った教材を使用した結果である。

表2 学習者による5段階評価

質問項目		回答					中央値	平均値
		5	4	3	2	1		
Step 1、2、3と進むにつれ聞けるようになった(成就感)	A高校	39%	35%	13%	10%	4%	4	3.9
	千葉大	51%	30%	12%	5%	2%	5	4.2
聞き取りの力がついたと思う(成就感)	A高校	28%	41%	18%	9%	4%	4	3.8
	千葉大	29%	40%	22%	6%	3%	4	3.9
CALLでの学習は楽しかった(満足感)	A高校	24%	36%	19%	14%	6%	4	3.6
	千葉大	36%	36%	19%	6%	4%	4	4.0

A高校  $N=1,875$ 、千葉大  $N=10,813$

注：回答は「はい」：5、「いいえ」：1 計100%とならないものは四捨五入による丸めの誤差のため

「聞き取りの力がついたと思う」という項目に対する評価は、千葉大学とA高校で大きな差は見られず、7割近くの学習者が4または5と肯定的に回答していた。しかしながら、教材使用中に理解度が高まったと感じたかどうかを問う「Step 1、2、3と進むにつれ聞けるようになった」に5と回答した学習者は、千葉大学では51%と半数以上だったのに対して、A高校では39%と12ポイントの差があつた。満足度を問う「CALLでの学習は楽しかった」という項目でも、5と回答した割合がA高校の学習者は千葉大と比較して8ポイ

ントほど低かった。

全体的には、成就感、満足感を感じた学習者が、感じなかった学習者と比べると圧倒的に多かったが、教材使用中に感じる成就感と満足感でA高校の学習者の評価が千葉大学の学習者よりもやや低い傾向が見られた。

## (2) 難易度と興味の影響

一般に、教材のレベルが学習者の英語習熟度と合っていない場合、また教材の内容に興味を持たない場合は、成就感や満足感を感じにくい。そこで、教材の内容に興味を持たたかどうかを問う項目に対する回答を観察したところ、A高校で5と回答した割合が19%だったのに対して千葉大学では30%と11ポイントの差があった。なお、難易度に関しては直接比較できる共通項目がなかった。

その2つの要因の教材学習中の成就感への影響を観察するために、「難易度は適切であった」「内容、トピックに興味を持った」という2項目と、「Step 1、2、3と進むにつれ聞けるようになった」という項目へのA高校の学習者の回答をクロス集計した結果を表3、表4に示す。なお、表3、表4では5段階評価の5、4を合計した回答を「肯定」、2、1を合計した回答を「否定」としてまとめ、3を「中立」とした。

表3 難易度と成就感

		N	Step 1、2、3と進むにつれ聞けるようになった		
			肯定	中立	否定
難易度は適切であった	肯定	1,409	1,148 (81%)	126 (9%)	135 (10%)
	中立	303	149 (49%)	100 (33%)	54 (18%)
	否定	153	74 (48%)	19 (12%)	60 (39%)

表4 興味と成就感

		N	Step 1、2、3と進むにつれ聞けるようになった		
			肯定	中立	否定
内容、トピックに興味を持った	肯定	1,156	965 (83%)	109 (9%)	82 (7%)
	中立	358	209 (58%)	106 (30%)	43 (12%)
	否定	344	192 (56%)	32 (9%)	120 (35%)

表3に関して $\chi^2$ 検定を行ったところ有意であった ( $\chi^2=255.89$ ,  $df=4$ ,  $p<.001$ )。表3から、教材学習中に成就感を感じていた割合が、難易度が適切の場合は81%であるのに対し、中立でも49%、難易度が適切でないと48%まで下がることがわかる。同様に、表4に

関して行った $\chi^2$ 検定も有意であった ( $\chi^2=285.95$ 、 $df=4$ 、 $p<.001$ )。教材の内容に興味を持てた学習者の83%が学習中に成就感を感じていたのに対し、興味が持てない場合は56%しか成就感を感じていなかったことが読み取れる。このことから、本指導実践で「Step 1、2、3と進むにつれ聞けるようになった」と感じた学習者が少なかった原因として、難易度、興味が合わなかったことが影響していると推定できる。本指導実践では、毎年数名の例外を除き、全員に同じ教材を使用させたため、学習者の英語力レベルや興味とのミスマッチが起りやすかった可能性がある。高等学校でも複数の教材を使用可能な環境を整え、英語力レベルや興味を調査した上で教材を割り当てる等の方策を取るのがより望ましいと考えられる。

#### 4.1.2 自由記述による評価

収集された1,875件のアンケートデータの自由記述部分すべてを精査した結果、肯定的な評価と考えられる記述は全体の約70%、否定的なものは約15%、どちらも判断がつかないものは約15%で、成就感、満足感の5段階評価の割合と大きな違いはなかった。下に代表的な意見を記す。

##### 【肯定的な評価 全体の70%のうちの代表的なもの】

- 実際に、4月に聞いた時と今年の2月に聞いた時とでは、聞きとれる内容が大きく異なりました。趣味で聞く洋楽や洋画などでも、以前より多くの単語を聞き取ることが出来るようになりました。それは、この *First Listening* のおかげだと言っても過言ではないと思います。
- 高校に入学して初めて Listening の教材を使い学習した。それまではネイティブの人の発音はチンプンカンプンだったけれど学習するにつれて単語が聞き取れたり、イディオムが聞き取れるようになった。
- 週4でやりたい。もっとやりたい。楽しい。リスニング、2年でもやりたい。
- 私は割とリスニングが苦手なほうなのですが、手取り足取りで教えてくれて勉強になりました。これをスマホ用のアプリで売るのはどうでしょう？僕はたぶん買います。

##### 【否定的な評価例 全体の15%のうちの代表的なもの】

- ねむくなったから集中できなかった。
- もっと生徒が親しみをもてて興味をもてる内容にしたほうがいい。
- 全文の訳が見られるようにしてほしい。
- ゆっくり読んでるバージョンの音声も収録してあったら、もっとやりやすかったと思った。

肯定的な意見には、英語聴解力の向上を実感するもの、教材での学習に満足し、継続学習を希望するものが多く、千葉大学でのアンケートと同様の傾向が見られた。一方、否定的な意見には、受け身の学習になってしまい飽きてしまったと思われるものや内容への不

満があった。さらに、日本語訳を求める意見やゆっくり話している音声を求めるなど、「三  
ラウンド・システム」の学習作業の目的や方法に関する理解が不足しているために出てき  
た不満と思われるものも散見された。学習者が、指導理論や個々の学習作業の目的への理  
解を深め、メタ認知ストラテジー（Oxford, 1990）の使用を可能にするための情報を、教  
材により多く組み込む必要があるかもしれない。

## 4.2 教員を対象とした調査

千葉大CALLを使った指導は、本稿の冒頭で引用した楠（2005）、桑原・高橋（2010）、  
武谷（2013）がそうであるように、これまで千葉大CALLの開発者または千葉大CALLに  
よる学習を経験した上でその理論を学んだことがある教員によって行われることが多かつ  
た。しかし本指導実践では、そのような経験のない教員も指導に携わることになった。そ  
こで、A高校で千葉大CALLを使った授業「英語表現Ⅰ」を担当していたことのある英語  
教員7名を対象に、アンケート調査を行った。その結果を下に記す。

回答者：A高校で「リスニング授業」を担当した英語教員7名

教員歴：5年未満：1名、20年以上：6名

千葉大CALLを使った指導を担当したのべ期間

1年：1名／3年：1名／4年：3名／6年以上：2名

### 4.2.1 教材の効果

「千葉大CALLを使った指導は、生徒の英語リスニング力の養成に効果があったと思いま  
すか。5段階で回答してください。」という項目には、2名が「4」5名が「5」と、  
全員肯定的な回答であった。また、そのように回答した理由は、以下の通りであった。

- 生徒のアンケートからも、満足感が伝わったし、センター試験の結果からも、良い結果が出たため
- センター試験の得点が上昇したから
- 本校のセンター試験におけるリスニングテストの得点が全国平均より高い
- センター試験受験者の得点が毎年全国平均を数点上回っていた。扱ったのは、1年次のみでした
- 両校とも全般的にリスニングの点数の向上が見られたから
- 画像の助けで予想することが容易で現実的な能力を養成できる
- 集中して学習する生徒が多く、リスニングテストのスコアが伸びているから

特筆すべきは、大部分の教員がセンター試験等のテストスコアで生徒のリスニング力の  
向上を指摘している点である。この指導は、高校1年生のみが受けているため、指導から  
ほぼ2年後に受験する大学入試センター試験の得点への影響がどの程度であったかを厳密  
に測ることは困難であったが、本指導を行っていなかった学年のリスニングテストの平均  
得点が全国平均よりも低かったにもかかわらず、教材を使い始めた学年から上回るように

なり、それが継続されていることが実証されている。このような結果が、教員が自信を持って千葉大CALLを使った指導を続けることができる要因となったのだと考えられる。また、テストの得点だけではなく、学習者の様子を直接見ている教員が「集中して学習する生徒が多く」「満足感が伝わった」と感じていることも注目すべきであると考えられる。

#### 4.2.2 指導内容

次に、「千葉大CALLを使った指導で、学習者に対して行っていたことをすべて選んでください。」という質問で複数回答を可能にした結果、表5のような結果が得られた。なお、この項目は、千葉大CALL開発と指導を両方実施している千葉大学教員が毎学期（ターム）実施しているものである。

表5 千葉大CALL関連の指導内容

	人数（回答者7名中）
教材の操作のサポート	6名
教材中の英語や内容に関する質問への個別対応	5名
リスニング力の重要性に関する話	5名
英語学習への動機づけを高めるための話や活動	5名
進度が遅れがちな学習者への声掛け	5名
進み過ぎている学習者への声掛け	5名
教材の効果的な使い方（学習方法）に関するアドバイス	5名
学習者の英語力レベルに合った教材の割当	4名
教材中の学習作業の目的に関する説明	4名
教材中の英語や内容に関する補足説明	3名
補助教材の作成	2名

回答者のほとんどが実施していた指導項目もあったが、「教材中の学習作業の目的についての説明」「教材中の英語や内容に関する補足説明」「補助教材の作成」を行っていた教員が比較的少なかった。これらは、教材の内容と指導法である「三ラウンド・システム」についての理解が必要な項目である。今後、千葉大CALLがより広く使われるとしたら、今まで教員が行っていたこれらの指導内容をよりきめ細かく教材に組み込む、もしくは詳細な教材使用マニュアルを作成する必要があるかもしれない。

#### 4.2.3 教員の負担

「三ラウンド・システム」は元々対面指導のために考案された指導法であった（竹蓋・水光, 2005）が、準備にかかる労力が大きく継続して実践できる教員がほとんどいなかったため、自習が可能なCALLにしたという経緯がある。忙しい教育現場に導入するためには、教員への負担を考慮することも重要である。そこで、千葉大CALLを使った指導の負担について質問したところ、他の授業と比べて「大きかった」と回答したのは2名、「同程度」と回答したのは1名、「小さかった」と回答したのは4名で、負担が小さいと感じ

た教員が多かった。理由は、以下のようなものであった。

**【負担が大きかった理由】**

- 教材やシステムの使い方に慣れるまでが大変
- 機器の保守や教員が研修し合う時間の確保

**【負担が小さかった理由】**

- 良い教材を使わせてもらえるため、授業の準備にかかる時間が他の科目に比べて少なくてすむから。
- LL教室の設備が整っていたので楽でした。
- 教材内の生徒に対する指示がわかりやすいため、生徒も教員も機械操作さえ覚えてしまえば、各自のペースで進められるから。
- 生徒の学習進度を管理するだけで良く、生徒が自ら学んでいくことが多かったから。

千葉大CALLを使った指導において、使い慣れない機器の操作および教材の使い方に関する研修、さらに機器のメンテナンスに関する負担は増加する。負担が大きかった理由としては、やはりこれらの負担が増えたことがうかがえる。しかし、これらの負担の一部は、機器や教材の使い方を習得することで軽減していくと考えられる。一方、負担が小さかった理由から、教員は従来の方法で教育を行う場合に必要な教材準備にかかる労力を節約できたことが読み取れた。その結果できた余裕は、「学習支援者」(山内, 2001)として学習者とのインタラクションを通じた動機付けや評価を行うことに使うことができると考えられる。

## 5. まとめ

千葉大学で開発されたCALL教材を使った指導が、公立高等学校の正規の英語授業で、1学年全生徒を対象に8年間にわたり実施された。この指導は、本稿執筆時の2021年度現在も継続中である。アンケート調査の結果、週1回約25分という限られた時間での指導にもかかわらず、教材を使用した学習者の多くから、肯定的な評価を得たことに加え、CALLという学習形態や「三ラウンド・システム」になじみの薄かった授業担当教員からも肯定的な評価を得たことがわかった。

一方、学習者の英語力レベルや興味によって、別教材を使用できる体制を整えた方が望ましいことも明らかになった。高校の授業でそれを実現するためには、短時間で実施できる精度の高い教材割り当てシステムの開発に加え、高校生英語力レベルと興味に配慮して作られた教材が複数なくてはならない。今後は、高校と大学がシステムや教材開発において連携することが必要になるのかもしれない。

コロナ禍に急速に教育のIT化が進んだ影響もあり、個人で行った方が効率が良いトレーニングは個別学習、協同学習やコミュニケーションが重要な学習は対面で、というように、

技能によって学習方法を分ける傾向が強くなる可能性もある。千葉大学で開発され、これまで高い効果が実証されてきた理論に基づいた、個別学習用の千葉大CALLが、そのような状況でこれからより広く活用されることを切に願う。

## 謝辞

「三ラウンド・システム」および *First Listening* を開発された故竹蓋幸生先生、多忙な中アンケートにご協力いただいた先生方、またアンケートデータ入力に協力いただいた本学非常勤事務職員の宮重保江氏、中野明美氏に感謝の意を表す。

## 参考文献

- Oxford, R. (1990). *Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know*. Rowley, MA: Newbury House.
- 石川正寛・西垣知佳子 (2005). 「リスニング指導からスピーキング指導への橋渡し—スキット・コンテントを活用した中学校における実践」『千葉大学教育学部研究紀要』 53, 285-291.
- 楠知美 (2005). 「4.2.7 横浜商業高校の場合」竹蓋幸生・水光雅則編『これからの大学英語教育—CALLを生かした指導システムの構築』(pp. 172-173) 岩波書店.
- 桑原市郎・高橋秀夫 (2010). 「三ラウンド・システムに基づいた高校生向け英語リスニング CALL教材の開発」『言語文化論叢』 4, 33-44.
- 武谷容章 (2013). 「日本人高校生 EFL学習者を対象とした英語コミュニケーション能力向上のためのコンピュータ支援による指導に関する研究」*Language Education & Technology*, 50, 131-153.
- 竹蓋幸生 (編) (1994). 『Listen to the World』教育出版.
- 竹蓋幸生 (1997). 『英語教育の科学』アルク.
- 竹蓋幸生・水光雅則 (編) (2005). 『これからの大学英語教育—CALLを生かした指導システムの構築』岩波書店.
- 竹蓋幸生・高橋秀夫・土肥充・竹蓋順子 (2001). Listen to Me! シリーズ『First Listening』, 竹蓋幸生 (監修), 千葉大学.
- 竹蓋幸生・高橋秀夫・土肥充・竹蓋順子 (2002). Listen to Me! シリーズ『Introduction to College Life』, 竹蓋幸生 (監修), 千葉大学.
- 竹蓋幸生・竹蓋順子 (2002). 「新しい英語教育『三ラウンド・システム』」『文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要』 1, 1-14.
- 山内豊 (2001). 『IT時代のマルチメディア英語授業入門』研究社.

## 注

- 1 竹蓋幸生氏 (千葉大学名誉教授) によって開発された日本人英語学習者のための聴解力養成を目的とした英語指導法。音声言語使用の実態に合った自然な速度で発話された言語素材の使用、3つに分割された学習行程、多様な学習サポート情報の適切なタイミングでの提示、学習内容の強い定着、などが主な特徴。